



11月30日上野水上音楽堂で、STOP再処理工場LOVE六ヶ所村「秋の大収穫祭」が開かれました。トークショーやライブに会場は盛り上がりました。「集まろう！伝えよう！」という歌声に、手拍子になり明るい希望の持てる集会になりました



グリーンコープ共同体を代表して挨拶をするグリーンコープ生協くまもと久米田理事長（左から3番目）

原子力発電所では、核分裂反応によるエネルギーで湯を沸かし、その湯気でタービンを回し、それで発電機を回し電気を起こす仕組みだ。燃料のウランを燃やせば核分裂を起こし、核分裂生成物という死の灰ができる。1986年に起きた旧ソ連チェルノブイリ原子力発電所の事故は、炉心に広

ストップ再処理 あらためて問う！ 六ヶ所再処理工場の問題

11月29日、「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク（以下、阻止ネット）1周年「ストップ再処理市民集会」を東京ドイツ文化会館で開催、220人（内グリーンコープからは18人）が集まりました。
はじめに京都大学原子炉実験所の小出裕章さんと原子力資料情報室の澤井正子さんの基調講演。次いで、岩手県の重茂漁協などから、日々の活動のようすが報告されました。また、阻止ネット呼びかけ人団体からそれぞれ活動の報告やアピールがありました。
グリーンコープからはグリーンコープ生協くまもと理事長久米田薫さんが「グリーンコープは、生命を脅かすものには断固として『NO！』と断言してきました。これからも、この問題に積極的に取り組んでいきます」と元気に挨拶しました。
最後に、六ヶ所再処理工場の危険性を再認識し、稼働中止の運動をさらにすすめることを全員の拍手で確認しました。
小出裕章さんと澤井正子さんの講演要旨を紹介します。

人類には、放射能を無毒化する技術がない

放射線被曝とは

生命体への放射線被曝の歴史は、レントゲンが偶然放射線を発見してからだ。被曝の問題も含めX線とは何か分からないまま研究が続けられた。キュリー夫人が白血病で亡くなったことなどから、放射線の人体への影響や取り扱いの難しさなどが、長い歴史の中で次第に分かってきた。
1999年に茨城県東海村の核燃料加工工場で起こった「臨界事故」では、2人の作業員が許容量を大きく超える被曝をした。日本の医学会の威信に掛けて治療したが、放射線が肉や骨を突き抜けて、身体のすべての組織が火傷をまわした。再生する組織がまったくなく最新の医療技術でも手の施しようがなかった。
すべては放射線のエネルギーが生命体の持つそれに比べて桁違いに高いためであり、被曝量がわずかであったとしても、リスクは伴う。

六ヶ所再処理工場の問題点

六ヶ所再処理工場で扱う膨大な放射能

六ヶ所再処理工場では、全国の原子力発電所約30基が1年間に排出する800tの使用済み燃料からのプルトニウムを抽出する。原発で使用済みとなったプルトニウムは他の生成物と一緒に燃料棒に閉じ込められる。再処理工場では、それを細かく砕き、硝酸で溶かし、プルトニウムを分離する。その際、原子力発電所が1年間で放出する放射能を1日で放出すると言われている。現在の原子力発電所が放射性物質を環境に放出する場合は、法律によって規制を受けている。しかし、六ヶ所再処理工場では、あまりにも多量の放射性物質を廃棄することから、国は原子炉等規制法の対



小出 裕章さん

ガラス固化体が製造不能！ 施設直下には活断層！

—六ヶ所再処理工場では、何が起きているのか—



澤井 正子さん

ガラス固化などの問題

六ヶ所再処理工場では、本格稼働のための最終的な試験運転であるガラス固化体の製造試験が行われている。しかし、その試験自体がうまくいっていない。高レベル廃液は液体のまま大変危険なので、超高温でガラスと混ぜて溶かし、それをステンレスの容器に入れて冷やし固めたものが「ガラス固化体」と呼ばれている。この1年間の実情は、試験の名に値しない惨憺たる状況だ。ガラスを溶かす溶融炉の温度が不安定で、ガラス温度を安定した状態で維持できない。そのため白金族などガラスと混ざらない物質が炉の底部にたまり、溶けたガラスを一定時間内に流下させることができない、などのトラブルが続いている。

六ヶ所再処理工場の高レベル放射性廃液は、死の灰を含んだ高レベル放射性廃液、アルカリ性廃液（薬品などの廃液）、不溶解残渣（硝酸にとけない金属など）の3種類がある。ところがこれまで、不溶解残渣を入れずに試験をしていたことが分かった。これでは試験として無意味だ。

こうしたトラブルが指摘されるたびに、日本原燃は場当たりの対策をたて対応してきた。つまり、ガラス固化体の技術そのものが実験段階のもので完成された技術ではないからだ。さらに問題は原子力安全・保安院の対応である。第4ステップまでの試験に不溶解残渣が入っていないことを知りながら次の試験への許可を出した。ガラス固化体の製造は六ヶ所再処理工場の事業許可の重要な要件だ。原子力安全・保安院は事業認可の取り消しを考慮すべきだ。

活断層の危険

日本の原発の建設時に想定されている耐震性は、不十分な状況。昨年の7月16日に起きた中越沖地震の影響で柏崎・刈羽原発は想定を超える揺れに襲われ、火災や使用済み燃料プールからの水漏れなどの事故が起きている。六ヶ所村再処理工場がある地域には、新たな活断層の指摘があり、予測されている以上の強度の地震が想定される。その対策もされていない。

象から除外してしまった。それは、放出された放射性廃棄物は海や空気中で希釈されるため環境への影響は少ないという理由からだ。
捕捉できる放射能
放出される放射性物質は、クリプトンやトリウム、炭素14などだ。こうした放射性物質を放出しない技術はすでに確立されている。
クリプトンは沸点が零下152度で、その温度に冷やせば液化して捕捉できる。クリプトンの捕捉技術は国費が投じられ完成していることを日本原燃も認めている。仮にクリプトンの年間の放出予定の全量を捕捉しても23kgにしかならない。トリウムも濃縮することが可能だ。炭素14についても水酸化ナトリウムと反応させれば固体化して捕捉できる。にもかかわらず、そうした措置も行わずに海や空気中に放出し、希釈・

拡散させることは広範囲に汚染を広げることではかない。
建設費用は、当初試算されていた7600億円を大きく超え、現在では13兆円にもなっている。そうしたことが、放射性廃棄物を環境中に出さないための経費の検出を阻んでいる原因とも言える。
子どもたちの被曝は断固避けなくては
大きな不安を抱えたまま、六ヶ所再処理工場は、本格稼働をめざしている。六ヶ所再処理工場の稼働を許し、食べものが汚染された場合、細胞分裂が活発な子どもたちは放射能被曝の影響を受けやすい。原子力を選択した世代の責任として子どもたちを守るためにも、放射線の影響が鈍いと言われている50歳を過ぎた世代が、積極的に引き受けて食べていく覚悟が必要だ。